

# 第68回 憲法を考える映画の会

## 「テロリストは誰？」

### 手元資料

- 日時 2023年2月12日（日）13時30分～16時30分
- 会場 文京区民センター 3A 会議室

#### ■手元資料 目次

- 資料① 映画『テロリストは誰』について
- 資料② アメリカのみなさんに訴える  
……フランク・ドリル
- 資料③ 「テロリストは誰？」にこめた私の思い  
……きくち ゆみ
- 資料④ 「テロリストは誰？」の背景に  
……伊藤千尋
- 資料⑤ 「テロリストは誰？」関連年表
- 資料⑥ 推奨図書および
- 資料⑦ これからの憲法を考える映画の会

#### ■2月12日（日）のプログラム

- 12:45 集合準備(①椅子を並べる ②受付を作る  
③販売コーナーを作る ④映写・音響準備)
- 13:00 開場予定
- 13:30 開会（映画の紹介）
- 13:40 上映開始『テロリストは誰？』（120分）
- 15:40 休憩
- 15:50 トークシェア  
・参加者から（映画の感想）
- 16:30 これからの憲法を考える映画の会のご案内
- 16:40 閉会  
（片付け・退室 ①椅子を片付ける  
②受付・販売コーナー撤収  
③映写音響機器撤収

#### 第68回 憲法を考える映画の会

戦後、10年に一度の頻度で、戦争を起こしてきたのはアメリカです。日本はいま、集団的自衛権行使によって、専守防衛をかなぐり捨て、アメリカの戦争に追随し、参加しようとしています。

まずアメリカが、どのように戦争を起こしてきたか、見直して考えていきましょう。



# テロリストは誰？

WHAT I'VE LEARNED ABOUT U.S. FOREIGN POLICY : The War Against the Third World

2023年2月12日（日）  
13時半～16時半（13時開場）

文京区民センター  
文京区本郷4-15-14 地下鉄 春日駅2分・後楽園駅5分  
●加費：一般 1000円 学生 500円

映画『テロリストは誰？』 2004年 フランク・ドリル：編集

【映画の内容】

テロとの戦争を口実にアフガニスタンやイラクを侵略、占領したアメリカが実は最大規模のテロリスト国家だということを証明する全10本の証言、インタビューからなるドキュメンタリー映画。

元CIA高官や元司法長官等が証言。一般には知られていないアメリカの裏の姿を浮かび上げさせる。

原題は「第三世界に対する戦争—彼がアメリカの外交政策について語る舞台」。原簿は『戦争中絶』のフランク・ドリル。全米でおよそ100万人が観た豪華のドキュメンタリー集。

① 映画は、ベトナム戦争に反対するキング牧師の演説に始まる

②④ 「影の政府」：憲法の危機！ 国家安全保障のために作られた「影の政府」の中核をなすCIAの元高官は「第三世界」での秘密工作を告発する。

120分

- ⑤ 法田国有化を決めた後のイラン（1953）、
- ⑥ 共産党を認知し、農地改革を進めたグアテマラ（1954）、
- ⑦ 自国民の権利を主張したラッフル（1964）や
- ⑧ ガーナ（1966）チリ（1973）での民主政権運動
- ⑨ さらにキューバのカストロ大総統暗殺計画、ベトナム戦争（1960～75）イラン・コントラ事件（1987）と続く。
- ⑩ 中東の軍事衝突に燃料や物資、特許を握る学校が存在
- ⑪ や他国を含む同級OBによる連絡や人権侵害の激々
- ⑫ 経済制裁という大量産物、イラクでの石油支配復活の企て、
- ⑬ 同盟国インドネシア、東チモールでの大虐殺の黙殺
- ⑭ ノリエが選挙で勝利がなくなるまで始められた「選挙みねの
- ⑮ パナマ侵襲」（1989）
- ⑯⑰ 元米司法長官、ジャーナリストは「永久戦争国家と民主主義は両立するもの」と問い、「何故やめきれなかったのか」を知っている」と語りかける（①～⑯は上記写真の番号に対応）

#### 憲法を考える映画の会

〒185-0024

東京都国分寺市泉町3-5-6-303

TEL: 042-406-0502

ホームページ: <http://kenpou-eiga.com>

E-mail: [hanasaki33@me.com](mailto:hanasaki33@me.com)

Facebook: 憲法を考える映画の会



# 資料① 映画『テロリストは誰?』について



映画『テロリストは誰?』  
2004年 フランク・ドリル:編集 120分

「テロとの戦争」を口実に、アフガニスタンやイラクを侵略、占領したアメリカが、実は「最大最悪のテロリスト国家」だということを証明する全10本の証言、インタビューからなるドキュメンタリー映画。

元CIA高官や元司法長官等が証言する。一般には知られていないアメリカの闇の姿を浮かび上がらせる。

原題は「第三世界に対する戦争－僕がアメリカの外交政策について学んだこと」。編集は『戦争中毒』のフランク・ドリル。  
全米でおよそ100万人が観た衝撃のドキュメンタリー集。

① 映画は、ベトナム戦争に反対する**キング牧師の演説**に始まる。

②③ 「影の政府：憲法の危機」

国家安全保障のために作られた「影の政府」の中核をなすCIAの元高官は「第三世界」での秘密工作を告発する。

④ 油田国有化を決めた後のイラン（1953）、共産党を認知し、農地改革を進めたグアテマラ（1954）、自国資源の権利を主張したブラジル（1964）やガーナ（1966）、チリ（1973）での民主政権転覆。

さらにキューバのカストロ大統領暗殺計画、ベトナム戦争（1960～75）イラン・コントラ事件（1987）と続く。

⑤ 中南米の軍関係者に戦闘や暗殺・拷問を訓練する学校の存在や独裁者を含む同校OBによる虐殺や人権侵害の数々

⑥ 経済制裁という大量虐殺、イラクでの石油支配復活の企て、

⑦ 同盟国インドネシア・東チモールでの大虐殺の黙殺

⑧ ノリエガ將軍が非協力的になると始められた「嘘まみれのパナマ侵攻」（1989）

⑨⑩ 元米国司法長官、ジャーナリストは「永久戦争国家と民主主義は両立するのか」と問い、「何をすべきかはあなたの心が知っている」と語りかける。

（①～⑩は上記写真の番号に対応）

日本のみなさんへ

フランク・ドリル

第二次世界大戦の末、何十万人もの男女、子ども達を広島と長崎で殺した原爆投下の行為を、わたし自身そのメンバーである「平和のための退役軍人の会（VFP）」と、真実を求め思いやりのある何十万人ものアメリカ人に代わって、日本の人々に謝罪したいと思います。

原爆投下という醜い行為は全く必要の無いことでした。ただ、アメリカが原爆を持っており、ソ連や世界中に向かって進んで原爆を使う意思があることを示すだけに投下されたのでした。

アメリカ政府が「イラクは大量破壊兵器を持っているので侵略する」と言ったとき、私たちは言い返しました。

「アメリカ以外の世界中の大量破壊兵器を合わせたよりも多くの大量破壊兵器を持っているのは、アメリカ自身だ。しかもそれを使ったことがある唯一の国はアメリカだ。それは日本の人々に対して行われた。その上、大量破壊兵器の大半を世界中に売っているのも、第二次世界大戦後も戦争を扇動し続けているのもアメリカ自身である」と。

（中略）

世界の平和と公正さに関心をもち、このビデオを見て下さるみなさま一人一人に対し感謝の気持ちでいっぱいです。

どうぞこのビデオをあなた自身の教材として使って下さい。

それから友達や家族に勧めて下さい。

私たち人類に平和と愛をもたらし、戦争と抑圧を終わらせることができるかどうかは私たち世界市民の一人一人の行動にかかっているのです。

平和を!

フランク・ドリル

ビデオ「第三世界に対する戦争：僕がアメリカの外交政策について学んだこと」プロデューサー  
反戦マンガ「戦争中毒」発行人

## 資料② アメリカのみなさんに訴える フランク・ドリル

私がこのビデオ「僕がアメリカの外交政策について学んだこと——第三世界に対する戦争」を編集しました。最初にここに登場する人々の話を聞いたのはロサンゼルス(KPFK 90.7FM)ラジオでした。その基本的なメッセージは、CIAと軍産複合体、ペンタゴン(国防総省)、多国籍企業、銀行、大手マスコミ、そしてアメリカ政府が第三世界の何百万人もの人々の死に責任がある、と言うことでした。さらに多くの人々の貧困と抑圧については言うまでもありません。自国の民衆に対してむごい行為を繰り返す第三世界の独裁者や軍隊をアメリカ政府はサポートし、武器を与え、訓練してきたというのです。そしてそのすべてのことは、第三世界の資源と市場をアメリカが支配し、第三世界の人々を安い労働力として使い、戦争というビジネス(それはわが国最大のビジネスです)を継続させるためのものです。CIAは国際麻薬ディーラーたちと手を結んで、ヘロインやコカインをアメリカに密輸入し、その巨大な利益をCIAが行う幾多の秘密作戦の資金にしてきました。

第二次世界大戦以来、アメリカ政府は朝鮮半島、ベトナム、カンボジア、ラオス、エルサルバドル、グアテマラ、パナマ、イラク、ソマリア、ユーゴスラビア、アフガニスタンその他の国で、何百万人もが無実の人々に対して、自由と民主主義を守るため、或いは共産主義と戦うため、そして今ではテロと戦うため、と言う名目で爆撃を繰り返してきました。アメリカがイラクやキューバのような第三世界の国々に実施した経済制裁は、新しい大量破壊兵器となりました。

大手マスコミ、或いは企業メディアは、これらの真実を語ろうとしません。なぜなら、これらのことから利益を得ているまさに同じ企業がメディアの所有者でもあるからなのです。外交政策のことになると、マスコミやペンタゴンやCIAの見解をそのまま流します。私たちはみな生涯を通じて、「アメリカは自由と民主主義のために戦っており、われわれは善人なのだ」と教え込まれてきました。そして大多数のアメリカ人は、世界の他の国よりもはるかに自由と機会と富に恵まれた生活をしているので、このビデオの中で伝えられているような真実を知ろうとすることはほとんどありません。

私はアメリカ人が「集団的否定の心理」、一種の集団催眠にかかった状態で暮らしていると思います。大嘘の中で生きているのです。

もしダン・ラザー(CBSのメインニュースキャスター)やピーター・ジェニングス(ABCのメインニュースキャスター)や、トム・ブロコウ(NBCのメインニュースキャスター)やテッド・コッペル(ABCの看板番組「ナイトライン」キャスター)がこのビデオで言われていることを報道していないとしたら、彼らは本物のジャーナリストではありません。

これらのメッセージをなんとか知らせようとしている人々は、「愛国的でない」とか、過激派とか、破壊者とか、共産主義者、あるいは反米主義者とのレッテルを貼られ、主要メディアで発言する機会が与えられないのです。

もしあなたが、もう一つの真実を知ることに関心があるなら——それは恐ろしいことではありますが——このビデオを見るようにお勧めします。これらの残酷非道なことが私たちの政治体制によってサポートされ、私たちの払う税金で実行されています。

そしてこの悪行は、アメリカ人が目覚め、自らその中止を決断するまで継続されるでしょう。

最初の一步はこれが本当に起きていると知ることです。

私たちはずっと嘘をつかれているのです！私はこのビデオの登場人物が真実を語っていると信じています。それは本当に恐ろしい現実です。私たちがアメリカの外交政策について真実を知らされていない、と言うことをなんとか人々に知らせようと、私はこのビデオを製作しました。わが国は、第三世界の国々の資源を略奪し、第三世界の何百万人もの人々が殺され、抑圧されるのをサポートしてきました。もしアメリカの人々がこの真実を知ったら、ほとんどアメリカ人はこれらの行為に絶対に反対するだろうと私は確信しています。

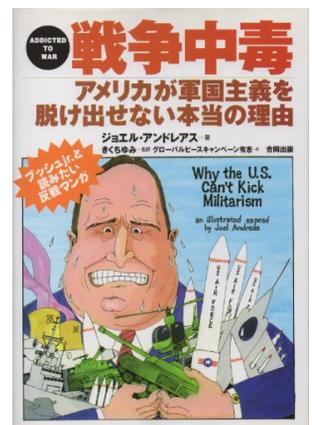
これが私がこのビデオを製作した目的です。できるだけ多くのアメリカ人にこのショッキングな秘密を暴露し、教育することです。

この戦争システムを平和システムに変えるためには、何百万人もアメリカ人が、私たちの名で、私たちの税金で行われてきた事実を理解し、私たちが大嘘の中で生きている、と言うことを悟る必要がある、と私は思います。繰り返しますが、私たちのほとんどは暮らしに恵まれ、大手マスコミがこれらの真実を伝えないので、こうしたメッセージを伝え広げるとは、大変困難な活動だと思います。でも、私たちがやらなくては戦争はなくなりません。

どうかこのビデオを観て、あなたがこの地球に住むすべての兄弟姉妹たちに平和をもたらすために何ができるか、考えて下さい。  
平和を！

フランクドリル：

ビデオ「第三世界に対する戦争：僕がアメリカの外交政策について学んだこと」プロデューサー  
反戦マンガ「戦争中毒」発行人



## 資料③ 「テロリストは誰？」にこめた私の思い きくち ゆみ

アメリカが好きで、アメリカ人の友人も多い私にとって、9・11事件は他国の出来事とは思えないほど衝撃的でした。あのとき私には離婚で別れて以来、異国に暮らす子ども達がありました。そばにいて守りたいけれど、そばにいられない。なんとか戦争を食い止めないと、テロが広がり、子どもたちを守ることができない。そんな気持ちから本能的に動いていました。気がつくと、「グローバルピースキャンペーン」を立ち上げ、アメリカの主要紙に平和の広告を出すなどの一連の活動をはじめていたのです。

千葉の鴨川の里山でシンプルに暮らし、自給自足をめざしてきた私の人生は、あの日以来大きく変わりました。環境問題を解決するというライフワークに「戦争を止め、平和を作る」という新たな課題が加わったのです。

代わったのは私の人生だけではありません。日本が初めて自衛隊を戦闘地に送り、今度は多国籍軍にも参加します。憲法を改正することもなく、国会審議も経ないままで、日本があつという間に「戦争のできる国」に根底から変わりつつあるのです。アジアで2千万人のいのちを奪い、広島・長崎に原爆を落とされた日本は、武力で紛争を解決することを永遠に放棄したのではなかったでしょうか。

この「テロリストは誰？」を日本語字幕にして広めよう、と決めたのは、日本の自衛隊のイラク派遣が公言されはじめた2003年のこと。アメリカと一緒に軍事行動をすると言うことが、どういうことなのか、この映画を観て、考えてほしいと思ったのです。残念ながら日本の私たちはあまりにも無知で、ナイーブです。いい加減に、米軍への「思いやり予算」はやめられないでしょうか。沖縄で訓練した海兵隊がファルージャに無差別攻撃をし、2004年の4月だけで1400人も殺しました。そのほとんどは女性と子どもでした。

「テロリストは誰？」はそれぞれの作品のダイジェスト版ですが、それだけにアメリカの外交政策の非情さや恐ろしさ、第三世界の人々に対する差別的ないのちの軽視、武力を前面に押し出す外交政策が立体的に伝わってきます。

私は日本の政治家全員にこの作品を観てもらい、「こんなアメリカと一緒に軍事行動をする覚悟が本当にできているのですか」と問いたいのです。「それが日本にとって、私たちにとって、なんの益があるのですか」とも。

日本はアメリカがはじめた「対テロ戦争」を支持し、自衛隊を送り、参戦しています。人道復興支援をしていると言っけれど、本当でしょうか。ちゃんと機能していた都市や村を破壊したのは誰？何のための破壊？自分の仲間（アメリカ）が壊したものを元に戻すのは、「復興」ではなく、「補償」と言うべきです。

自衛隊は武装した米兵や武器を運んでいます。どこが人道的で、復興と何の関係があるのでしょうか。その米兵がイラク市民を殺しています。本来なら殺人幫助罪に問われる行為です。

戦争を支持するなら、その結果にも責任を負わなくてはなりません。若くして死んでいった双方の兵士たち、殺された1万人以上の一般市民やジャーナリスト、手足を失い、失明し、やけどをし、愛する人を失い、心に傷を負った人々。劣化ウランの影響で、白血病やガン、先天性障害でいのちを失った、あるいは失いつつある子どもたち。この結果に責任があります。

イラク戦争と占領を支持した小泉政権。こんな政権を支持した日本人の責任は重大です。小泉政権を支持していない私も、こんな政権を許している、という意味でやはり責任があります。

私たちが戦っている相手は本当は誰なのでしょう？空爆され、炎の中で焼かれ、瓦礫の下敷きになっている人々は、本当にテロリストですか？イラクから毎日のように届くあどけない子どもや赤ん坊の無残な写真を見るたびに、この責任は、日本や私自身にあるのだ、と胸がはりさけそうになります。

一人でも多くの人に、この映画を見てほしい。それから、本当のテロリストはいったい誰なのだろうかと問い直してほしい。それで開催条件を誰も自主上映会をできるように設定しました。どんな小さい規模でも構いません。どうかあなたの地域でも上映して下さい。

なお、日本語の字幕では字数の関係でかなり思い切った意識をし、文字数を減らしましたが、この本（「テロリストは誰？」ガイドブック）に収録したシナリオはなるべく原文に忠実に翻訳しなおしたので、字幕の訳とは違っていることをおことわりします。また、「戦争中毒」（邦訳、合同出版刊）を合わせて呼んでいただくと、よりいっそう理解が深まると思います。

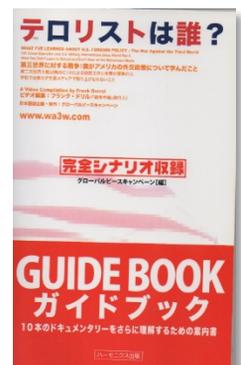
8ヶ月にわたって、ともにこの仕事に取り組んだ今村和弘さん、フジワラトシカズさん、そしてパートナーの森田玄に、心からありがとうございます。この本を手にとってくれたあなたにも、愛と感謝をこめて2つの言葉を贈ります。

「望んでいる変化そのものにあなた自身がおなりなさい」（ガンジー）「思慮深く、献身的な小さな市民のグループが世界を変えられると言うことを疑ってはいけな。かつて世界を変えたものは、実際それしかなかったのだから」（マーガレット・ミード）

きくち ゆみ：

「テロリストは誰？」

日本語版プロデューサー



## 資料④ 「テロリストは誰？」の背景に 伊藤千尋

過去の中南米を見れば、未来の世界が見える。なぜなら唯一の超大国となった米国がいま世界で行っていることはこれまで米国が中南米でやってきたことだからだ。

「米国の裏庭」と呼ばれる中南米で、米国は歴史上好き勝手に侵略してきた。米国企業の利益のためには民主的な政権をクーデターで転覆させ、米国の利益にかなうなら軍事独裁政権さえ支援し、米国人の人権は主張するくせに他の国の人々はいとも簡単に抹殺した。米国を自由と民主主義の天国だと信じる人は考え直した方がいい。

私は1980年代に朝日新聞の中南米特派員として現地に取材し、米国が中南米で何をしているかを見た。2001年からは米国特派員となり米国を内部から見た。赴任した2週間後に、9.11テロ事件が起き、米国人の多くはテロを起こされた理由を考えずにひたすら報復を叫んだ。米国民は国内では民主主義の実現に努力し、米国人も米国社会も魅力的だが、外国に対してはひどい人権蹂躪をしているのが現実だ。

それは今に始まったことではない。1954年、中米グアテマラのアルベンス大統領が農地改革をして農民に農地を分けようとしたとき、米国は米企業ユナイテッドフルーツ社の利益のためにこの民主政権を倒した。以後この国は米大使館の監視下で米国べつりの軍事独裁政権が支配し、内戦が36年も続いて約20万人が死んだ。

当時のグアテマラを旅行中に米国の横暴を見て怒ったのがアルゼンチン人のゲバラである。彼はその直後にメキシコでカストロと出会い、そのままキューバ革命に参加した。革命が成功し農地改革をしようとしたらここでも米国が介入した。耕地の大半を占めていた米国の砂糖会社の要請で米政府はカストロ政権に圧力をかけた。キューバが屈しないと経済封鎖し、1961年には米中央情報局（CIA）が旧独裁政権の軍人を集めてキューバに軍事侵攻させた。

南米チリに選挙で社会主義政権が誕生し、銅山を国有化しようとする米国は1973年、チリの軍部を扇動してクーデターを起こさせた。80年代になると中米各国で内戦が激しくなった。ニカラグアで左派政権が誕生すると、CIAは旧独裁政権の軍人を組織してコントラと呼ばれるゲリラを結成し内戦を起こさせた。

「テロリストは誰？」の最後の場面はニカラグアだ。人々が「エル・プエブロ・ウニード・ハマス・セラ・ベンシード（団結した人々は、もはやうち負かされない）」と声をそろえる画面の風景を私自身、80年代のニカラグアとチリで実際に目にした。

米国が軍事援助どころか軍事侵攻したのが1983年のグレナダと1989年のパナマだ。気に入らない国には海兵隊を送って侵略し、他国の政府をカづくで転覆した。

中米エルサルバドルでは「死の部隊」と呼ばれた暗殺集団が政府軍の中に作られ市民を虐殺した。彼らに暗殺の仕方を訓練したのも米国だ。中南米の軍人を集めて教育する米ジョージア州の「米州学校」（スクール・オブ・アメリカンズ）は「米軍暗殺学校」とか「クーデター学校」などのあだ名で非難される。卒業生には国民3万人を虐殺したアルゼンチンの軍政時代の大統領ら、各国でクーデターを起こした軍人がそろっている。

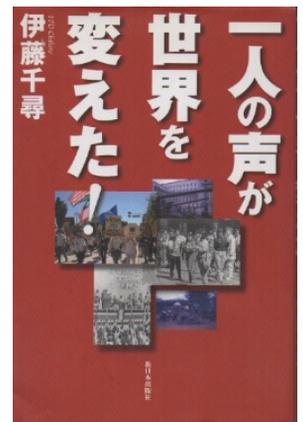
過去半世紀の主な動きを追ってさえ、これだけ非道なことを米国はしてきた。そもそもこの国は、生まれたときから侵略を始めた。インディアンと呼ばれた先住民を虐殺して領土を広げ、メキシコに戦争を仕掛けて領土の半分を奪った。略奪行為を正当化するために掲げた文句が「マニフェスト・デスティニー（明白な天命）」である。米国が領土を広げるのは神が定めた天命であるとし、神の名で侵略を続けた。米大陸を支配下に置くと太平洋に進出し、ハワイやフィリピンを併合した。ペリーの日本来航もその過程で起きたことである。その後もベトナム戦争から今日のイラク戦争まで世界を踏みにじり続けている。

テロと言う言葉は本来、フランス革命の際に反政府派の市民を殺した当時の独裁政権に付けられた言葉である。本来は国家による市民の人権弾圧を指した。米国はいま、自分の利益に反する人々をテロリストと呼ぶが、米国の手でひどい目に遭った中南米やアジアの人々から見れば、米国こそテロリストなのだ。

米国をおそったテロの直後、カリフォルニア州の反戦集会で米国人のNGO代表が叫んだ……「米国旗が立つところ、世界のどこかで人が死ぬ」と。グローバリズムの現代、米国の動きを放っておけば世界のどこかで同じ悲劇が繰り返される。

伊藤千尋

朝日新聞外報部記者・前口サンゼルス支局長コスタリカ平和の会共同代表「燃える中南米—特派員報告」（岩波新書）「人々の声の世界を変えた!—特派員が見た「紛争から平和へ」（大月書店）など多数



## 資料⑥ 「テロリストは誰？」 関連年表

1857年	チモール島東西に分割	1980年	イラン・イラク戦争 エルサルバドル・ロメロ大司教暗殺される
1898~1910年	フィリピン征服戦争。数十万人を殺害	1981年	レーガン大統領就任
1903年	パナマ共和国独立	1983年	ノリエガ・パナマ軍最高司令官就任 アメリカ軍、グレナダ侵攻。厳しい報道管制を敷いたため死傷者数はいまだ不明
1929年	キング牧師生誕	1984年	スクール・オブ・アメリカンズ、フォートベニングに開校
1933年	F.ルーズベルト大統領就任	1986年	イラン・コントラ事件 コスタリカ・アリアス大統領就任、ハル農場封鎖
1945年	ベトナム民主共和国成立 (初代大統領ホーチミン) トルーマン大統領就任 広島・長崎に米国原爆を投下 (日本降伏・第2次世界対戦終了) 国際連合設立	1987年	アメリカ軍、リビア空爆。カダフィ大佐暗殺は未遂に終わる コスタリカ・アリアス大統領ノーベル平和賞受賞
1946年	第一次インドシナ戦争始まる チャーチル、米国で「鉄のカーテン」の演説	1989年	ブライアン・ウィルソン列車事故 ブッシュ(父)大統領就任
1947年	アメリカ・国家安全保障法、CIA設立	1989年	エルサルバドル、イエスス会宣教師殺害される
1948年	スクール・オブ・アメリカンズ、パナマに開校	1990年	アメリカ軍パナマ侵攻
1949年	コスタリカ。軍隊廃止	1990年	イラク、クウェートに侵攻。それを受けて、国連は有楽に対して経済制裁措置を決議
1950年	朝鮮戦争始まる(～53年)	1991年	米国が主導する多国籍軍が1月17日、本格的にイラクを攻撃、第一次湾岸戦争開始。 2月28日、イラク軍が降伏し、戦争終結
1951年	イラン・モサデグ政権成立、石油国有化	1993年	ソビエト連邦崩壊
1953年	アイゼンハワー大統領就任 イラン・クーデター、モサデグ首相失脚	1993年	クリントン大統領就任
1954年	グアテマラ・クーデター、アルベンス政権転覆 ジュネーブ会議でベトナム南北分割	1995年	ボスニア空爆。劣化ウラン弾使用
1955年	アラバマ州で市営バスの差別的座席制に抗議してバス・ボイコット運動が起きる 公民権運動の始まり	1999年	東チモール住民投票 パナマ運河返還
1958年	イラク革命・イラク共和国成立	2000年	ブッシュ(子)大統領就任。ネオコングループが台頭
1959年	キューバ革命	2001年	9.11事件。米国、アフガニスタンへの報復攻撃開始
1960年	ベトナム戦争始まる(～75年) 南ベトナム民族解放戦線結成	2002年	東チモール独立
1961年	ケネディ大統領就任 アメリカ、キューバと国交断絶	2003年	第2次湾岸戦争(イラク戦争)
1962年	キューバ危機	2004年	ブッシュ大統領再選 アメリカ軍、イラクのファルージャ包囲攻撃
1963年	ワシントン大行進、キング牧師演説 ケネディ大統領暗殺、ジョンソン大統領就任		
1964年	キング牧師ノーベル賞受賞 公民権法制定		
1965年	トンキン湾事件、ジョンソン大統領が北爆開始		
1968年	キング牧師暗殺される パナマクーデター、トリホス政権樹立		
1969年	ニクソン大統領就任		
1972年	ニクソン大統領訪中		
1973年	アメリカ内外で反戦運動が高まる ニクソン大統領、ベトナム戦争終結を宣言 チリ・ピノチェト軍事クーデター、アジェンダ政権を転覆		
1974年	フォード大統領就任		
1975年	サイゴン陥落、南ベトナム無条件降伏、ベトナム戦争終結 東チモールのインドネシア侵略		
1977年	カーター大統領就任		
1978年	パナマ、トリホス・カーター条約		
1979年	オラン・イスラム革命。ホメイニ師反米ナショナリズムとイスラム原理主義を掲げ、非暴力革命でハーレビ国王を追放。イラン大使館占拠事件 ニカラグア・サンディニスタ革命 イラク・バース党革命、サダム・フセイン大統領就任		

## 資料⑥ 推奨図書&映像作品

左欄に今回の「テロリストは誰？」に関連した推奨図書をガイドブックから紹介します。  
右欄は、これまで憲法を考える映画の会で上映した作品の中から「アメリカの戦争」について考えようとした作品です。私たちが一貫して考えなければならない問題であることがあらためてわかります。

「民衆のアメリカ史」(全3巻)  
ハワード・ジン著(平野孝訳) TBSブリタニカ

「甦れ独立宣言—アメリカ理想主義の検証」  
ハワード・ジン著(飯田雅子・高村博子訳) 人文書院

「アメリカの国家犯罪全書」  
ウィリアム・ブルム著(益岡賢訳) 作品社

「戦争中毒—アメリカが軍国主義を抜け出せない本当の理由」  
ジョエル・アンドレアス著(きくちゆみ監訳) 合同出版

「アメリカ帝国への報復」  
チャルマーズ・ジョンソン著(鈴木主税訳) 集英社

「グローバリズムは世界を破壊する—プロパガンダと民意」  
ノーム・チョムスキー著(藤田真利子訳) 明石書店

「帝国との対決—イクバル・アフマド発言集」  
デイビッド・バーサミアン著(大橋洋一・河野真太郎・大貫隆史訳) 太田出版

「金で買えるアメリカ民主主義」  
グレッグ・バラスト著(海塚泉・永峯滋訳) 角川書店

「ラムゼー・クラークの湾岸戦争—いま戦争はこうして作られる」ラムゼー・クラーク著(中平真也訳) 地湧社

「レッグス」ブライアン・ウィルソン著(千田典子・島田啓介訳) カタツムリ社

「スコットリッターの証言—イラク戦争」スコットリッター著(星川淳訳) 合同出版

「経済成長がなければ私たちは豊かになれないだろうか」ダグラス・ラミス著 平凡社

「世界は変えられる—TUPが伝えるイラク戦争の「真実」と「非戦」」TUP(平和をめざす翻訳者たち)監修 七ツ森書館

「第9条と国際貢献—戦争のない世界をめざして」勝守寛著 影書房

「世界の新しい支配者たち」ジョン・ビルジャー著(井上礼子訳) 岩波書店

「オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史」1-3 (1 大田直子訳 2 熊谷玲美、小坂恵理訳 3 金子浩、柴田裕之訳) 早川書房



第7回  
2013年11月02日

ショック・ドクトリン



第13回  
2014年7月19日  
ファルージャ  
イラク戦争  
日本人人質事件…そして



第17回  
2015年4月25日  
イラク 戦場からの告発  
ジャーハダ イラク民衆の闘い  
シリア内戦  
イスラム国の正体を暴く



第20回  
2015年9月13日

誰も知らない基地のこと



第22回  
2015年11月28日

ハーツ・アンド・マインズ  
ベトナム戦争の真実



第24回  
2016年3月26日

グラニート  
独裁者を追い詰める



第26回  
2016年6月26日

ザ・思いやり



第29回  
2016年10月15日

NO (ノー)

### 憲法映画祭2023

毎年、5月の憲法記念日を前に、憲法を考える映画の会では「憲法映画祭」を催してきましたが、来年の会場が決まりました。

と き：2023年4月29日(休・土) 30日(日) 午前～夜  
 ところ：武蔵野公会堂ホール(吉祥寺駅南口2分)

今回の映画祭は、7回目の「憲法映画祭」。「憲法を考える映画の会」としても10年目の会になります。

これから上映作品や講師を選んでプログラムをつくり始めます。

二日の内、一日は「孫とともに見る憲法の映画」を選ぶのはどうか、などと言う意見も出ています。幅広く憲法について考えることのできる映画祭にしたいと考えています。是非一緒にそうした機会を作っていきましょう。

### 第2回 むのたけじ反戦塾

と き：2022年3月12日(日)  
 13時30分～18時(13時開場)  
 ところ：文京区民センター3C会議室  
 プログラム：

- ① むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』序章「現在を指す七〇〇万年の歩み」を読み解く
- ② 前回(12月18日の論議からの継続論議、憲法9条の価値、可能性をめぐるむのたけじさんの考え方
- ③ 参考映像(むのたけじさんの発言作品を中心に)

\* 詳細は未定です。決まり次第資料を送りますので、参加希望者は下記問合せ先までご連絡を！  
 参加費：1000円 学生・若者:500円

### 「むのたけじ反戦塾」のおさそい

むのたけじさんは、15年戦争に敗れた後、日本人が戦争を起こした体質と何も変わっていないことを憂いて、郷里の秋田に帰って仲間と学習して出直そうとした人です。

その活動報告として新聞「たいまつ」を発行しました。松明のように自ら輝いて暗闇の世の中を照らそうとしたのです。

むのたけじさんの「たいまつ」に習って、いまの社会状況、政治状況、あるいは憲法が無視され、戦争への準備が着々と進められている中で、それを何とかしなければと考えている人が集まって話し合う場を作れないかと考えました。それがこの『むのたけじ反戦塾』です。

そうした学習会のなかで、むのたけじさんが晩年、とくに戦争と憲法の危機に対して訴え続けてきた映画や映像、著作、あるいは新聞記事などに加えて、むのたけじさんの平和に向けた活動を知る人から話を聞き、それをもとに話し合い、自分たちの戦争反対、改憲を阻止する活動を作っていきたいと考えています。

何より大切なことは、ひとりひとりが今の自分たちの問題を見つけ、考え、話し合っ、どうしたら良いかを探し出すことだと思います。この学習会もまた参加者自身が自分たちで創り出す新しい学習会にしていきたいと考えています。そして話し合い、考える場づくりを少しずつでも続け、広げて行きたいと思えます。

参加できる方は下記までご連絡ください。  
 当日の学習会で話し合う内容の一部を載せた「手元資料」をお送りします。

\* 問合せ先：090-4599-5314 武野  
 〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201  
 E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

### 現代アート「第9回 花とみどり・いのちと心展」

と き：2022年12月23日(金)～23年1月29日(日)  
 (連日9:30～16:30、初日14:00 最終日15:00まで  
 12/31、1/1、1/23/24は休館)

ところ：国営昭和記念公園〈花みどり文化センター〉  
 〒190-0014東京都立川市緑町3173 JR中央線立川駅  
 北口より徒歩10分、多摩モノレール立川北口駅徒歩8分  
 国営昭和記念公園あけぼの口を直進

現代アート「第9回 花とみどり・いのちと心展」  
 30人の造形作家による現代アート展 入場無料



展示作品のひとつ、中垣克久「時代の肖像 プーチンへの贈り物 新型架空爆弾『No.9 Article of the Rose』—ゾフィー・シヨル、ハンス・シヨル兄弟より」は、下記、「第3回 憲法と市政を考える映画会@立川」で上映される『白バラの祈り』のゾフィー・シヨルに関連した作品です。

### 憲法を考える映画のリスト2023 制作開始

2014年以来、1～2年に一度のペースで制作してきました「憲法を考える映画のリスト」の2023年版の編集・制作を始めました。来年4月末の憲法映画祭には完成をめざしています。

自分たちで上映会を開くことのできる「憲法を考える映画」のリストです。新作、旧作にかかわらずお奨めの映画(映像)がありましたらどうぞ紹介ください。

また、このリストがきっかけで「自分たちでも上映会を開きたいが、映像はどこで借りられるのか」と言った問合せがとくに地方から相次いで寄せられています。

過去にさかのぼって、私たちが子どもの頃に観た映画、「戦争は嫌だ」「自分の考えをしっかりと持たなければ」と強く思った映画なども、その映像のありか、貸出先を探し、データベースを創っていきたく考えています。

### これからの関連上映会

#### 第3回 憲法と市政を考える映画会@立川

と き：2023年1月28日(土)  
 ところ：立川アイムホール(立川駅)  
 映 画：『白バラの祈り—ゾフィー・シヨル最期の日々』  
 いま「表現の自由」など「自由」が危機に立たされています。改憲による「緊急事態条項」の動きも強まっています。この映画は問います。静観は善なのか。勇気と信念をもって「自由」を守るために闘ったゾフィーたちの姿は私たちに何かを教えてくれるはずです。

#### 映画『悠久からの愛』新春中野上映会

と き：2023年1月29日(日) 14:00～  
 ところ：なかのZEROホール視聴覚室(地下2階) 中野駅  
 映 画：『悠久からの愛』(金子サトシ監督)  
 全国に2700基以上のダムがある日本。河川を水資源として合理的に集めることができる一方、水流をせき止めてダム湖に貯水することで健全な水循環・物質循環を破壊するダム公害をもたらした。自然災害が急増し、甚大化するなかで必要なのはダム増強か、あるいは脱ダムか。ダム建設の反対運動や、ダムの撤去を実現させた現場取材し、自然と人との共存を模索していく。